十一月喜多流自主公演番組

解説開始　十二時十五分
開演　十三時

事前解説　狩野祐一

能

子方・猟師の子千代童　塩津希介
シテ連・猟師の妻　友枝真也
後シテ・猟師の霊　前シテ・老人　香川靖嗣
烏頭
ワキ・旅僧　舘田善博
大鼓　柿原弘和
小鼓　飯田清一
笛　栗林祐輔

アイ・外の浜の浦人　前田晃一
後見　友枝昭世　狩野祐一

地謡　金子龍晟　高林呻二
塩津圭介　長島茂
大島輝久　出雲康雅
佐藤陽　内田成信

狂言

樋の酒
シテ・太郎冠者　三宅右矩
アド・主　土屋光生
小アド・次郎冠者　三宅近成

休憩（二十分）

仕舞

氷室　佐藤陽
班女　粟谷明生

能

龍田
後シテ・龍田姫　前シテ・巫女　佐々木多門
ワキ・旅僧　則久英志
ワキ連・従僧　御厨誠吾
ワキ連・従僧　渡部葵

アイ・立田の里人　高澤祐介

後見　塩津哲生　粟谷浩之

大鼓　柿原光博
小鼓　飯冨孔明
太鼓　梶谷英樹
笛　槻宅聡

地謡　髙林昌司　友枝雄人
佐藤寛泰　狩野了一
粟谷充雄　中村邦生
谷友矩　金子敬一郎

附祝言

終了予定時刻　四時四十五分頃

解説

烏頭（うとう）

陸奥へと旅する僧が道中、越中の立山にて修行をし麓へ下ると、一人の老人と出会う。老人は、自分は陸奥の外の浜にて猟師をしていた者で、去年の春ごろ亡くなった身だと言い、故郷の妻子を訪ね、自分に蓑と笠を手向けるよう告げてくれと願う。そして家族への證として、自分が臨終の時まで着ていたという衣の片袖を僧に渡すと、再び旅立つ僧を涙ながらに見送り、行方も知れず消えてしまった。〈中入〉
陸奥の外の浜に着いた僧は、かの猟師の家を訪ね、妻に事情を話し衣の片袖を差し出す。夫の形見の衣を取り出して合わせてみると、ぴたりと合ったのだった。僧が亡者が望んだ蓑と笠を手向けて弔うと猟師の亡霊が現れる。亡霊はウトウの親鳥の鳴き真似をし子を誘い捕まえていた様子を見せ、その咎により地獄でこの鳥に苦しめられていることを訴え、さらなる回向を頼むと消えてしまったのだった。
（約七十五分）

樋の酒（ひのさけ）

主人が外出するので、太郎冠者に米蔵、次郎冠者に酒蔵の番を言いつける。酒蔵の次郎は寂しさを紛らわせるため酒を呑み始めると、米蔵の太郎が「自分も飲みたい」とねだるので、次郎は窓から竹の樋を渡して太郎に酒を飲ませる。いい気分になった二人は、樋で飲むのが面倒になり、酒蔵へ合流して大いに酒宴に興じるが…。
（約二十分）

龍田（たつた）

六十余州に経を納める旅の僧が、大和より河内へ出るべく龍田川のほとりまでやってきた。川を渡って龍田明神へ参ろうとすると一人の女が現れ、和歌を引用して川を渡るのをたしなめる。女は自分は龍田明神に仕える巫女であると言い、別の道から僧を案内する。御神木である紅葉を始め宮々を案内するうちに、巫女は実はここの神体、龍田姫であると述べるとその身から光を放ち、社殿の中へと入ってしまった。
〈中入〉
神の告げを待とうと神前にて眠る僧のもとに、龍田姫が姿を現す。当社の縁起を語り龍田の景色を賞美し神楽を舞ううちに夜も明け、天下泰平を寿いで神はおかえりになったのだった。
（約九十五分）

令和八年 十二月 自主公演番組予告

令和八年 十二月二十日（日） 十三時始
● 会場 十四世喜多六平太記念能楽堂（喜多能楽堂）
● 前売券 販売中

千寿　内田成信
項羽　塩津圭介